■論　文■

幸福な家族祝祭型クリスマスを越えて

― ヨッヘン・クレッパー作詞「降誕祭の聖餐の歌」について―

富　田　恵美子・ドロテア＊

抄　録

本論は，ナチス時代の詩人ヨッヘン・クレッパーが1936年に作詩した「降誕祭の聖餐の歌」の分析を試みる。ルカ２章の降誕物語を基に詠まれた４詩節を，音律，アクセントの配置，視点の変化，内容の展開，思想的背景などから分析する。降誕祭を祝う目的，過去の想起，嘆願，賛美の根底には，苦悩の中から神の言葉と十字架と聖礼典に縋る精神が浮き彫りになる。個人の歌が教会の歌になる過程にも言及する。

Key words：ドイツ文学　賛美歌　ヨッヘン・クレッパー　ナチス時代

序

ヨッヘン・クレッパーは教会暦の様々なテーマを題材にした歌を作詞したが，中でも最も精力的に取り組んだテーマがクリスマスである。現代ドイツの年中行事の中でもクリスマスは今もなお最も盛大に教会と家庭の祝祭として行われているので，20世紀前半におけるドイツ国内亡命文学を代表する詩人がクリスマスを重視したこと自体は特に不思議ではない。しかし注目に値することは，クレッパー作のクリスマスの歌が作詩された時代は，文学的に不毛と思われていた30年代の只中であり，ナチズムにより窮地に立たされたドイツの教会で新しい賛美歌が生まれ，それまで低迷していたドイツ語賛美歌の歴史が復興期を迎えたことにある。本論で取り上げる「聖餐の歌」も，精神的にも追い詰められたドイツ現代人の悲嘆を表している。同時に，決して現代ドイツ文学特有のニヒリズムに陥ることなく，苦難に研ぎ澄まされた詩人の精神が真の降誕祭の意義を問い直し，その核心に迫ろうとする意思が貫徹している証でもある。

クレッパーの歌は発表された当初，少数の人々に絶賛されたものの，当然ながら時流に乗ることはなく，教会内部で半世紀以上静かに読み継がれ熟成を遂げた後，最近になってようやく研究者のあいだでも注目を集めるようになってきた。(1)現代史，政治学，神学の視点からクレッパーの詩を研究した論考は現在多少あるが，テキストを文学作品として読み解くものは今もなお極くまれである。(2) 現代ドイツ賛美歌を代表する詩人クレッパーの世界を少しでも解明するために，本稿では，本紀要38号（2004）(3) で発表した７編の対訳に引き続き，クレッパーが最初に作詞したクリスマス

＊ Tomita, Emiko　Dorothea
日本女子大学人間社会学部助教授

の歌である「降誕祭の聖餐の歌」を文学の視点から分析する。読者はその対訳を参考せられたい。

１．全体の構成

（1）概　観

詩集『キリエ』（初版1938年）に収録されている「降誕祭の聖餐の歌」[4]は，一編を除き全て聖書の言葉の引用から始まる。これは，単に詩の効果を高めるために詩人がモットーとして掲げたものではなく，そこにはクレッパーの詩に対する基本的な考え方が現われている。つまり，クレッパーにとって詩とは，詩人が詩を詠み出す以前に語られた神の言葉に対する応答，つまり祈りであるということを意味している。この基本姿勢は，例えばクレッパーが残した日記にも現れており，毎日のようにヘルンフート兄弟団の聖書日課（Losungen）を書き留めてから，その日の記録を書き始めていることからも分かる。[5]「降誕祭の聖餐の歌」では普段12月24日（クリスマス・イブ）の晩，あるいは12月25日（クリスマス第一祝日）の朝に朗読するルカの福音書２章の８節から11節を引用している。引用から分かるように，ここでクレッパーはクリスマス物語の焦点を脇役である羊飼いの群れに絞っている。その理由は，ナチズム台頭により困窮した状況におかれているクレッパーが最も自然に自己を投影できる対象でもあったということが推測できる。つまり，窮地の只中で福音を聞くということを意味している。馴染み深い聖書箇所であるので，その正確な引用箇所に辿りつくのは容易であるが，クレッパーは決して引用箇所を述べることなく，ただ「聖書」（“Die Bibel”）と記す習性がある。その理由として考えられることは，クレッパーが聖書の一箇所，あるいは複数の箇所をつなぎ合わせて引用するとき，その箇所を通して常に聖書全体を「神の言葉」として意識しているところに起因しているからである。

歌自体は４詩節からなり，鮮明な構図の基に組み立てられている。第１詩節では降誕祭を祝う前提と目的が簡潔に述べられており，間接的な告白として捉えることができる。第２詩節では過去の出来事を想起している。第３詩節ではその回顧を基に神に対する嘆願へと展開し，第４詩節では賛美とその将来の展望に目を向けている。

（2）形　式

「降誕祭の聖餐の歌」は，教会賛美歌として馴染み深い形式の６行から成る詩節形を４回繰り返している。詩節の構成は，４詩行の前節（Aufgesang）と２詩行の後節（Abgesang）からなり，前節は各２詩行からなる上段（Oberstollen）と下段（Unterstollen）より構成されている。この形式の骨組みがそれぞれの詩節の思想的な展開を的確に支え，詩的表現の透明度を高めている。その骨格に合わせる形で前節の交差韻に対して後節では対韻が一貫して用いられている。更に，交差韻の性格を強く打ち出すために前節の４詩行では２音節と１音節の終止形を交替させている。

全４詩節共通の特徴である詩行の上拍（Auftakt），４つの強音節，そして強音と弱音の規則的な交替は，歌全体に統一性を持たせている。例外的に弱音節が２節続くところが二箇所[6]あるが，そこはどちらも極端に弱い音節であり，４詩節が音律に逆らっているという印象を読者に与えることはない。一方，言葉の意味を汲み取りながら４詩節を音読していくと，クレッパーがドイツ語特有の抑揚をいかに自然に，しかも効果的に活用していたかが見えてくる。詩節毎に繰り返される４つの強音節の音律を基盤に，各詩行に主要なアクセントを一箇所設けることによって言葉のリズムを生み出している。どこに主揚節を置くかは，ドイツ語の場合朗読者の解釈にも左右されるが，できる限り自然に，しかも言葉の意味を汲み取りながら音読していくと，次のような構図が浮き彫りになる。第１詩節の６詩行では，主要なアクセントがそれぞれ第４，第２，第４，第２，第３，第３の強音節へと移っていき，押韻を益々際立たせている。第２詩節の主要アクセントの動きを見ると，第１，第３，第１，第３，第１，第１の強音節が目につく。第３詩節では，第３，第２，

第３，第２，第３，第３の列，第４詩節では，第１，第３，第１，第３，第１，第１という列が浮き彫りになる。このようにどの詩節でも生き生きとした言葉のリズムがいかに重要視されているかが見て取れる。ここまで形式を整えて神に祈るということは不自然ではないかという考え方もあろうが，この詩の究極の目的は，詩人の自己満足にあるのではなく，一個人が作詞した歌が教会の祈りとして活用されることにある。つまり，教会に集められた会衆が声を併せ，心をひとつにして祈る礼拝の場では言葉のリズムが吸引力を高めるのである。

対訳に目を向けながら，４詩節共通の韻律をまとめると，下記図１の通りになる。

前節	上段	x x́ x x́ x x́ x x́ x	a
		x x́ x x́ x x́ x x́	b
	下段	x x́ x x́ x x́ x x́ x	a
		x x́ x x́ x x́ x x́	b
後節		x x́ x x́ x x́ x x́	c
		x x́ x x́ x x́ x x́	c

図１

２．詩節の分析

（1）告　白

第１詩節は，祈りの私的な側面と普遍的な側面を結合させながら神に対する応答を展開している。両者を比較すると，圧倒的に後者の方に比重がかかっている。「我が神」から始まってはいるものの，その直後に包括的な表現に変わっていることから見えてくるのは，クレッパーがこの歌を書いた動機である。きっかけは生命の危機が差し迫る中で詩人自身が体験した苦痛であったものの，自己憐憫に留まることなく視野を広げ，真に祝うための大前提を見つめることによって教会の歌に高めていこうとする意気込みの軌跡として読み取ることができる。第１詩節でこのように祈りの条件が整った後，第２詩節からは教会の会衆を想定した「我々」の視点が最終詩節まで貫かれている。

最初の詩節に相応しく，降誕祭の定義が３通り登場する。「あなたの大いなる光の祭典」という一番目の表現は，教会暦の三大祝祭のひとつとしての祭りとヨハネの福音書に見る光と闇に基づいたクリスマスの理解，「あなたの星」という二番目の表現は，旧約と新約の関連性の中で理解される祭りとマタイの福音書による東方の博士の物語，「あなたの聖夜」という三番目の表現は，ドイツ文化圏に根差した，古来から伝わる祭りとヨハネの福音書に準拠したクリスマスの理解を想起させる。多種多様な祭りの層をここで密接に繋ぎ合わせている語が所有冠詞「あなたの」（“ dein ”）であり，クレッパーは神こそこの祝祭の主人公であるという理解の元に立って祈りを作り上げている。

このように，真のクリスマスに対する標識は多角的に述べられているが，一方，偽クリスマスと称すべきものは何なのかについては，一切言及していない。これは，教会賛美歌は性格上，悪の弾劾よりも善の賞賛に集中する傾向があることと，公の場を前提とする賛美歌の場合，例えばナチス政権が提唱する新しいクリスマスの流儀に矛先を向けることは物理的に不可能であったことにも起因する。ちなみに，時代の軋轢の中で鍛えられた当時の読者は行間を注意深く見つめることに長けており，用心深く包み隠された時代への批判も難なく読み解くことができたと考えられる。

クレッパーは，前節で真のクリスマスを迎える前提を述べ，続いて後節でその目的に言及することによって前節と後節をはっきりと対応させる形で構成している。彼が考えるクリスマスに向けての準備を，断食にでもショッピングにでもでもなく，「苦難」，しかも現在進行形の苦しみと「悔悛」に見出している。強いて言えば，ここでは窮乏が降誕祭を祝う唯一の「条件」として見なされているのである。次いで後節では，間接的ではあるが，降誕祭の目的が述べられている。それは神の星の出現と預言の成就であり，両方とも神の業として理解され，人はそれを専ら受動的にその身の上に起こる出来事として体験することを明確にしてい

る。従って，内容の展開上，第１詩節の最も著しい特徴は，神の啓示に向かう思考の方向性である。クレッパーの歌は暗い，と称されることもよくあるが，闇を現実として受け止め，潜り抜け，その先にある救済の領域に至ることこそこの詩の目的であり，クレッパーの他の詩の基調にもなっていることが多い。更に，クレッパーが具体的に聖餐の場を詩の最終目的地として視野に入れていることから，既に第１詩節で，聖餐には直接触れていなくとも，当然ながら救済の出来事を体感する聖餐に至る大前提として，罪の自覚を意識していることも見過ごすことはできない。

悔い改めのテーマが前面に出ているこの詩節では，語頭の子音が２行ごとに揃っており，(7) 押韻している強音節の前後にある弱音節の母音も揃っていることによって，いっそう活発な動きのある，心揺さぶる雰囲気が醸し出され，それが「苦悩」，「裁きの恐ろしさ」，「最も罪深い者」，「嘆く」といった感情を現す語彙群と呼応して神の前に立つ者の驚愕を想起させる。前景にある神の裁きと背景にある神の恵みの両面に目を向けながらも，両者の相違を浮き彫りにすることは，クレッパーが書いた他の作品にもよく見られる現象である。裁きに恐れおののく体験を，慈しみを味わう前のいわば通過点と解釈し，福音が人の心に届く時点をいわば最終目標と考えるところにルター派独特の思想的源流が如実に現れている。(8)

（2）回　顧

第２詩節では，祈りの対象である神に対する視線は変わらないが，私的な眼差しと包括的な表現は姿を消し，替わって客観的，且つ具体的見地から降誕際の原点を見つめることになる。クレッパーは，歌の冒頭で引用したルカの福音書による羊飼い達の物語を韻文の形に凝縮させ，内容的には，所々物語を更に躍動的にとらえ，イメージを膨らませてはいるが，ほとんど純粋なパラフレーズにとどめている。彼にとって，降誕の出来事を回想するということは，聖書を都合よく読むということでは決してなく，聖書の語っている場面を想像しながら，その精神に最大限に忠実でありたいという意図の現われである。

第１詩節で共存していた「苦悩の中に入る者」（“ die Leidenden ”）と「最も罪深い者」（“ der Schuldigste ”）が第２詩節では「最も貧しいもの」（“ den Ärmsten ”）に静かに合流する。クレッパーは，罪と苦悩はどこか連動していることを意識しながらも，第２節ではそれ以上深入りすることなく，つまり隣人の目に刺さっている棘に注目することも，罪の告白を他者の断罪へと摩り替えることもなく，自身の罪と世の罪を念頭に，第三者の「貧しさ」に共感する。引用文にはない，断定的表現(9)に劇的な要素(10)を加えることによって臨場感を高め，神の成せる不思議な業を激しく対立する二つの動きで表現している。直説話法の語「求める」（“ suchtest ”）と接続法の語「呪う」（“ fluchtest ”）の交差韻を極端に対立させ，烙印を押された哀れな群れを神に選ばれた選民と見なす信仰の視点を打ち出している。羊飼いたちが「神に呪われているかのように」見えるということは，「呪い」という仮面の奥には，実はその正反対の慈しむ神がおられるという，ルター派に見られる典型的な “ sub contrario objectu ”(11) の思想の現れである。ここでは，乏しい者が神の目には尊いという考え方に加え，更に社会から疎外された小さな群れに対する神の哀れみが物語の中心として捉えられている。なぜクレッパーが作詩した最初のクリスマスの歌が羊飼いたちに注目しているのかがここから理解できる。それは，クレッパーが目の当たりにしたユダヤ人迫害，ひいてはユダヤ系キリスト者の弾圧の実態を，過酷な現実に愕然としている羊飼いたちのイメージに引き寄せていたからに他ならない。本稿の第３章でも触れるが，社会からも教会からも見捨てられた妻子（ユダヤ系の未亡人とその連れ子）に寄り添って生きるクレッパーは，あたかも神に呪われ世に見捨てられたかに見えるユダヤ人を実は神が選ばれた民として見ていることを日記の随所に記している。ナチス時代に教会を含め社会全体がいかに堕落していたかは，例えば1933年10月14日に「ヴィジョン」

と題してシレジア地方ブレスラウの週刊誌『福音の声』(“ Evangelischer Ruf ”) に掲載された記事[12]から窺うことができよう。

> 「礼拝の〈ヴィジョン〉。最初の歌が鳴りやんだ。祭壇の前に立っている牧師が声を上げる。
> 〈非アーリア人は礼拝堂をご退出願います。〉
> だれも身動きしない。
> 〈非アーリア人は礼拝堂を即座にご退出願います。〉
> 再び皆が静まり返ったままである。
> 〈非アーリア人は礼拝堂を即座にご退出願います！〉
> するとキリストが祭壇の十字架から降りて礼拝堂を去る。」

その直後にこの雑誌の刊行は政府から禁止されてしまったほど，時代が歪んでいたことを想起すると，クレッパーの場合も一見ただ聖書の物語を反復しているように見える歌の奥に強烈な社会批判が秘められていることが分かる。そこには，日に日にユダヤ系家族に対する迫害の厳しさが増していく中で，その渦に巻き込まれていく詩人の悲痛な叫びが凝縮されている。クレッパーは，かつてルターが主張した信者の「貧しさ」(“ arm ”) の伝統[13]を汲みながら，その時代と比べものにならないほど「最も貧しい人たち」(“ Ärmsten ”) を教会と社会の現実に認めたわけである。ただし，この思想はいわゆる現代の解放の神学とは無縁であり，むしろ人間の根源的な貧しさと神の成せる救いの業に関心が向けられている。

６行目に出てくる「世」は，第１詩節の１行目の「神」と合わせて第１詩節から第２詩節までを大胆に括り，「神」から「世」への指向を明確にしている。一方，第３詩節と第４詩節は，キリストへの祈りであり，「世」に生きる「私たち」と括られている。第１・２詩節の核は「神」であり，第３・４詩節の核は「キリスト」である。言い換えれば，祈りの対象は歌の真ん中を軸に「神」から「キリスト」にスライドしていると同時に，両方を根底でつなげているのはまさに降誕の神秘，神の受肉である。クレッパーはナチス時代において，神の子がユダヤ人の母から生まれたということを人一倍に心に留めていたことを日記から知ることができる。[14]

このように，歌の前半と後半にまたがって「世」が「神」と「私たち」の間を仲介する重要な場となっている。ここで言う「世」は特にヨハネの福音書を彷彿とさせる。なぜなら，福音は全世界に向けて発信されたことを認めながらも，次の詩節では「世」がそのメッセージを真剣に受け止めなかったという悲観的な見方が示されるからである。クレッパーは旧約の世界から，選ばれた小さき群れこそ神に最も近い民であるがゆえに，真っ先に神の裁きと慈しみに触れるという考えを読み取り，その真意をユダヤ人殺戮の現実に見出したのである。従って，ここでは古代人の世界から現代人の世界への飛躍を模索する学者の贅沢な悩みとは無縁に，苦難の只中で必死に聖書の言葉に縋り，そこで読み取ったメッセージを今ある自分自身への言葉として受け止める聖書の理解が働いている。[15]

詩節全体を振り返ると，結局物語りの主役は羊飼い達ではなく，神であることが判明する。第１章で指摘した主要アクセントと動詞の配列を見ると，神を表現する言葉はいかにも能動的であり積極性に満ち溢れているのに対して，羊飼いたちを描写する動詞は，消極的で不安定なものばかりである。[16] この頼りない群れが「最初の証人たち」に選び抜かれたというところから過去の出来事の今日的意義を問う視線が集中しているわけである。クレッパーは，「最初の証人たち」(“ die érsten Zeugen ”)といったアクセントの工夫により，2000年前から今日に至るまで降誕の「証人たち」の列は途絶えることなく続いているということを暗示している。

（3）嘆　願

第３詩節以降は，この世に生きる「私たち」と「主」（＝キリスト）との関係に焦点が絞られていく。信仰の目は，第２詩節と第３詩節の間を隔てているはずの2000年の時空をかくもたやすく飛躍することを可能にしている。「世は (…) 祝うようになりました」という表現は，キリストが生まれた数百年後から現代にいたるまで様々な慣習を取

り入れ，排除しながら降誕を祝う礼拝が変貌の一途をたどってきたといった歴史的な観点から見た降誕祭を意味しているのではない。むしろ，ここはキリストの降誕をキリストの前で覚えるという極めて特殊な発話場面であり，2000年の隔たりよりもキリストと世との隔たりが詩人の心を捕らえ，初めて嘆きの言葉が発せられる。悲しみを必死に堪えるかのように，“ zu ”（…過ぎる）の長母音を無理やり弱音節にはめ込みながら，この小さい語に悲嘆の念を凝縮させている。信徒への呼びかけ，社会改革といった運動を視野に入れているわけではないが，降誕祭が歪曲されている，と警鐘を鳴らしているのである。よく見ると，ここだけ“ Fest ”ならぬ “ Feier ”が使われている。両方とも「祭り」ではあるものの，後者はより楽しげな，華やかな側面を際立たせるのに対して，前者はより厳かな，神聖な意味を含んでいる。クレッパーは「派手」（“ bunt ”）な色彩を“ Feier ”と結びつけ，一方，“ Fest ”を「あなたの大いなる光の祭典」，「あなたの星」といった表現に結びつけることによって，その色合いの微妙な違いを通して祝祭の真偽の程を確かめようとする。突き詰めて言えば，彼の嘆きの根拠は快楽を拒絶する禁欲主義ではなく，過剰な祝賀モードにより祭りの中核にある聖性が見失われてしまうという恐れにある。クレッパーの日記には，彼がクリスマスをいかに念入りに準備し，家中を飾り立て，しみじみ味わったかが詳細に書き記してあるが[17]，そこから推測できることは，自省の念も含めた上での嘆きとして述べていることである。しかし，この詩節は痛烈な社会兼自己批判で終わっているわけではない。むしろ，キリストの前で嘆き，嘆きの闇の中でその闇をはるかに超越した神の闇を願い求めるにいたる。なぜなら詩人はそこにこそキリストの光を見出そうとするからである。これはクレッパーの他の多くの作品についても言えることだが，彼の考える「夜」とは，真意が明らかになるとき，本心が現れるとき，啓示のとき，身を委ねるときである。[18]

ようやく３行目以降，「私たち」の願い事が具体的に述べられるが，それは「世」に対する厳しい眼差しと緊迫した空気が張り詰めている状況の中での祈りである。「私たち」は「世」の一部でありながら，まるで「世」ではないかのような雰囲気を醸し出しているのは，前節の４行に多くの対照的な表現が詰め込まれているからである。クレッパーは，例えば「祝い」（“ die Feier ”）と「あなたの祭り」（“ dein Fest ”），「派手」（“ bunt ”）と「夜」（“ Nacht ”），「世」（“ die Welt ”）と「あなたの星」（“ dein Stern ”），「あまりにも…軽快に」（“ zu… heiter ”）と「よりよく…備える」（“ bereiter ”）を対比させ，更にそれらの対比を前章で述べたアクセントの配列によって浮き彫りにしている。前節に対して，後節では「飼い葉桶」（“ Krippe ”）と「十字架」（“ Kreuz ”）が並列されており，ここでは逆に，本来対極に置かれている「生」と「死」の概念に深い繋がりを持たせ，死ぬために生まれるというキリストの降誕の核心に迫る。ここでも再びアクセントと，それに加えて頭韻（“ Krippe ”・“ Kreuz ”）が文脈全体を引き立たせている。

では，「我々」が具体的に何を祈り求めているかを見ると，「私たち」と「世」がどこで一線を画すかが見えてくる。これほどの対照概念を挙げながらも，状況の改善，「世」の改悛，変革など，「世」に関する願いは一つも表されていない反面，もっぱら「私たち」の変貌を乞い願う祈りが続いていることに気づかされる。「世」において最も濃密な形でキリストの臨在を味わう聖餐の場に集まった「我々」が願うことは，押し寄せる苦難に耐え得るより「深い」，より「篤い」信仰であり，キリストへの渇望が「世」に対する期待を遥かに凌駕することができるのだ，と解釈できよう。このように，第３詩節の特徴として最も著しい対極化が最終行に，いわば第３詩節の最終目標，つまりキリストをそれら全ての逆説を掌握する存在「人の子」として理解し，ここで始めてキリストの名が挙がるが，多くの呼び名のうちで「人の子」（“ Menschensohn ”）が選択されているのは，降誕と十字架の両者を受難における神の啓示として捉えようとしていたからだ，と考える。

（4）賛　美

第４詩節では，第１詩節から第３詩節までの過程で見えてきたものを踏まえての結論と展望が打ち出される。前詩節では「祭り」，「あなた」「証人たち」など，２人称と３人称が主格として続いていたものが，ようやく最終詩節で，「私たち」が主語になるところも出てくる。つまり，「私たち」から「あなた」（＝キリスト）に対する言動へと視線が部分的に変化していくということである。しかし，音読して分かることは，アクセントの配列が「１－３－１－３－１－１」という，第２詩節と同じ構造の配列で，内容的にも第２詩節と呼応しており，必ずしも「私たち」が主役にはなっていない，ということである。

例えば，一行目を見ると，副文の主語は確かに「私たち」になっているが，アクセントが「…ということ」（“ daß ”）に置かれていることによって，語られた内容（Aussagegehalt）の方が「私たち」よりも重視されていることが分かる。ここから内容的にも第２詩節と著しく呼応している点が見えてくる。要するに，あの頼りない「最初の証人たち」が召命を受けたのと同様に，「私たち」もその後に続くという内容が詩の形式においても表されている。ここでも，現実の危うさに目を背けることなく，４行目に表されている信仰の確信を将来に対する不安が広がる３行目の接続法と対比させている。３行目の「私たちのお祭り」（“ unsere Feste ”）とあるように，ここだけ「祭」が複数形になっている背景には，全体主義政権に付き物の記念式典，総統誕生日，種々のパレードなど，国民感情を昂ぶらせ，士気を高める祭の洪水が氾濫していたことも働いている。ちなみに，クレッパーがベルリンでこの歌を書いた1936年11月は，世界中の注目を浴びた夏のオリンピックが幕を閉じた直後であり，クレッパーも大都市の抗しがたい渦の中にいる自分を強く意識していたことを窺わせるソネットを後世に残している。[19] この類の祭がいかに「不意に水の泡」になったかは言うまでもないが，第４詩節では，人間が作り上げた祭の儚さよりも「キリスト御降誕の日」（“ Christtag ”）に目が向けられており，毎日をキリスト御降誕の日，つまり御子なる神の受肉に立ち返る日である，と理解してもよいだろう。なぜなら，「～であるべき」（“ muß ”）と強調しているところを見ると，「キリストの日」と直訳し，毎日を主なるキリストの日，言い換えれば，その日その日をいかに過ごそうとも，世に生きることそのものが，キリストが受肉した世に生きることだからであろう。だからこそ，ここで“ Fest ”（祭）ならぬ“ Tag ”（日）が用いられており，降誕祭に秘められている普遍性を意識してのことと言える。

紆余曲折を経て，ようやく第４詩節の後節で賛美の境地に辿り着く。ここで使われている前置詞を吟味すると，クレッパーの考える聖餐の根拠は，実体にでも比喩にでもなく，実存にあるということが明らかになる。５行目にある“ in ”という前置詞は，聖餐を「苦しみと罪と窮乏」の現実がある中での聖餐として位置づけ，６行目の“ bei ”という前置詞は，聖餐におけるキリストの臨在として捉えていることを示唆している。５行目に接続詞なしで連発される名詞は，打ち付ける現実の波の凄まじさを物語っている。ここに神と人間自身と世との葛藤の記憶はあるものの，配餐を前に語られる言葉は賛美のみであり，その後，沈黙が訪れる。

最後に，第１詩節から第４詩節までの全体の流れを見てみよう。祈りのフォーカスは，長い学びとそれに続く嘆願の後に密度の濃い賛美に終わる。クレッパーは，長い葛藤を経て賛美に導かれる人たちと，苦しみの中に降りてくる神が出会う場としてクリスマスと聖餐を深く関連付けていたに違いない。４詩節に亘って摩擦音が決して少なくない中，一貫して二極端の空間とは異なる次元を想起させるのが神への呼びかけである。第１詩節の“ dein ”（３回），第２詩節の“ du ”（３回），第３詩節の“ dein ”（３回），第４詩節の“ dich ”（３回）に加え，「神」（“ Gott ”），「人の子」（“ Menschensohn ”），「主」（“ Herr ”）の３通りの神の呼び名が唱えられている。ここまで体系的に一貫しているということは，クレッパーが伝統的な手法に基づき「三位

一体の神を崇める」という思いを意図的に祈りの中に織り込んだといっても過言ではなかろう。詩集『キリエ』の一つとして相応しく，ここで取り上げた歌も主を主と認めることを終始目的とする祈りであり，自己本位の幻想にも，幼稚な理想主義にも頼ることなく，時にはこの世と袂を分かつ者としてこの世で神を崇めつづけるという基本姿勢に現代人の成熟した礼拝の在り方が示されているように思えてならない。

３．教会の歌になるまで

（１）個人の歌

クレッパー自身は，1931年に結婚した未亡人ハンニとその子を，血の繋がりのある家族以上に愛し，この歌がたたえる小さき群れへの神の慈しみに対する信頼をユダヤ系ドイツ人である妻子に植えつけた。貧しい者，疎外された者，無力で虐げられたもの，無学な使徒たちへの神の愛を説き，時が満ちるのを夢見，待ち続け，ついに1938年12月に妻の受洗に立ち会い，同年のクリスマスに初めて家族揃って礼拝に与った。しかし，ここで取り上げた歌を書いた1936年はまだその喜ばしい兆しもなく，妻の宗教を理由に実家の家族から見放され，職場を追われ，ユダヤ人に対する圧力が日に日に凄まじさを増し，裕福な妻に経済的に支えられながら初めて手掛けた長編小説の執筆作業が終わりかける中，強烈な疲労感と絶望感に苛まれている時であった。「信仰以外のものはすべて崩壊した。僕はただの重荷，ハンニに負わされた運命，それを背負い込むハンニが僕の心を打つ。僕のせいで家中に圧力が圧し掛かる。この状態でどうやって書き続ければよいのか。どうやってハンニの負担を減らせるのか。ここにあるのはただ罪と苦しみのみだ。」[20] と日記に記している。クレッパーは深い淵でただ「十字架と聖礼典と御言葉」に縋るのみという結論に至る。[21]そして，十日後，第一アドベントの前夜に「クリスマスの聖餐の歌」を書く。つまり，「苦悩」を第１詩節に，「御言葉」を第２詩節に，「十字架」を第３詩節に，「聖礼典」を第４詩節に瞑想していたことを日記が明らかにする。牧師の息子として幼年時代に経験した華麗な祝祭の記憶を胸に，[22]この世的な将来への展望が全く見えず，ドイツ社会の支配層が，伝統的な家族中心型のクリスマスを「ゲルマン的・ドイツ的クリスマス」[23] や「民族的クリスマス」（“Volksweihnacht”）[24] に刷りかえようとしていたことに危機感を募らせながらも，ドイツ国民の静かな抵抗にも期待を寄せようと努めていた。[25]聖餐式でさえその例外ではなく，時流に歩調を合わせた教会では，「国民の名において洗礼を施し，聖餐ではパンを大地の体，ぶどう酒を大地の血として与えている」[26]，と日記で嘆く。

このように，詩を書く動機となったのは，深い淵に突き落とされた思いからではあったが，書いた意図は，教会の歌の中に加えられることにあった。

（２）教会の歌

恐らく最初にこの歌が教会の礼拝に組み込まれ，実際に活用されたのは，1940年のベルリン・ニコラスゼーの教会におけるクリスマス礼拝であろう。軍務からクリスマス休暇に一時帰省したクレッパーがクリスマス第一祝日を迎えた時のことを日記に記している。

> 「昼間，クリスマスの太陽が光を放っていた。外面的には伝統的なものがいくつか欠けていた―しかし何と豊かな，守られた，祝福された，そして今や更に深みを増した祭だろう。教会は満員，説教は素晴らしい。聖餐式が無いのが物足りなかった―そこでヴィーゼ牧師がクリスマスの福音書の朗読の後に僕の「クリスマスの聖餐の歌」を唱えた。動揺してしまうほど心揺さぶられた。あちこちから教会の牧師たちと教会に向かう人たちが僕たちに暖かい言葉をかけて挨拶をすることが，どんなに心温まることか。ここだ，ここがふるさとだ。
>
> 年々，クリスマスがいよいよ深く豊かになった。クリスマスの福音書にこんなにも聞き入ったのは今年が初めてだ。今年の重荷はこの祭の恵みに支えられている。」[27]

その後，詩集『キリエ』は20版を重ねて今日に

至っているが，その間，どこでどのような形で人々に届いたかは本稿では網羅することができない。ここではせめて最近目にした活用の事例を二つ紹介するに留める。

2002・2003年のクレッパー生誕100年・没後60年記念に南部ドイツ在住の牧師A. ベーレントがクレッパーの歌を教会暦にはめ込んだリストを作成している。[28] そこでは，「降誕祭の聖餐の歌」をドイツではクリスマス第１祝日に当たる12月25日の聖餐礼拝で歌うことを提案している。この詩には合唱のための曲があることも指摘しているが，彼自身が提案しているドイツ教会讃美歌集『EG』[29] 369番の旋律を見ると，会衆の歌として礼拝に取り込むことを前提にしていると考えられる。なぜなら，旋律はバロック時代の詩人Ｇ．ノイマルクが作詩・作曲した賛美歌「ただ神にのみより頼むものは…」（“Wer nur den lieben Gott ...”）として今日まで大変親しまれているからである。この歌は，古い讃美歌集には大抵「十字架の歌」（Kreuzlieder）のグループに入っていた，試練における神への信頼がモチーフになっている歌であり，その意味でもクレッパーの歌詞に大いに適している。

同じく2003年にヴッパータール神学大学実践神学教授Ｇ．ルダットがクレッパー記念行事のために作成した「ミサ・ポエティカ：ヨッヘン・クレッパーを記念する文学的礼拝」[30] と題する式次第を作成している。彼はそこで 配餐後の聖餐の感謝として「降誕祭の聖餐の歌」の最終分詩節を朗読することを提案している。[31]

クレッパー本人が特定の賛美歌を下敷きにこの歌を書いたのか否かは今のところ不明であるが，クリスマスへの関心が高い分，既存の賛美歌にも洩れなく目を通していたことは推測できる。筆者としては，全４詩節を「この夜に神の大いなる慈しみが現れ…」（“Dies　ist die Nacht ...”）というEG40番の旋律に乗せて聖餐の前に歌うことが理想的だと考える。なぜなら，Ｋ．Ｆ．ナハテンヘーファーが1684年に作詩，ランゲンエルスが1742年に作曲したこの歌は，闇夜に現れた光として御子の誕生をたたえる降誕祭に相応しい歌であり，第３詩節では「太陽と月と星が滅んでも／それももしかしたらあまり遠くない時に／それでもこの光とこの輝きは／あなたの天，あなたの全てなのだ」と歌っているところからも，クレッパーがこの歌を下敷きにしていたことも考えられるからである。EG 369番の旋律は，試練に耐えるという側面を前面に打ち出しているのに対し，EG 40番の旋律は，試練を克服するというところに焦点を当てている。第４詩節の後節にある重苦しい賛美も含め，歌全体を配餐に備える歌として捉えたい。

ここからは極めて私的な意見になるが，筆者としては第一祝日の前夜の徹夜課に最も相応しい歌だと考える。このクリスマス前夜祭（Christnacht）は，今ではルター派の教会でもほとんど祝われなくなったが，その伝統の一つとして神の裁きと慈しみの両面を神の聖性の顕れと解釈する見方がクレッパーの歌にも如実に表現されているからである。現に，ドイツでは今日もなお，普段は老人ばかりの小さな群れの教会でも，クリスマス・イブの晩課と第一祝日の朝課に限って教会離れした群集の波がロマンの輝きを求めて教会に押し寄せ，家族連れで大賑わいを見せる。その群集の興をそいで敢えてこの歌を歌わせようと考える牧師もどこかにいる筈である。「幸福な家族祝祭型クリスマス」の幻想が水の泡と化したとき，「クリスマスの聖餐の歌」から何か得るものを人々は見出すに違いない。

注

（１） 例えばHansjakob Becker u.a. (Hrsg.): Geistliches Wunderhorn. Große deutsche Kirchenlieder. 2. Aufl. München: C.H. Beck 2003.

（２） 富田恵美子・ドロテア著 「新年を迎える～ヨッヘン・クレッパーの賛美歌を手掛かりに」『日本賛美歌学会紀要』第１号（2004年），31－50参照。

（３）『テオロギア・ディアコニア』，2005年，153－168。

（４） Jochen Klepper: Kyrie. Geistliche Lieder. 20. unveränd. Aufl. Bielefeld: Luther-Verlag 1998. S. 34f.

（５） Jochen Klepper: Unter dem Schatten deiner Flügel. Aus den Tagebüchern 1932–1942.（以下，TB）München: dtv 1976.（初版1956年）―ヨッヘン・クレッパー著，小塩節・小鎚千代訳 『みつばさのかげに―愛と死の日記』日本基督教団出版局1977年。（日記の部分訳，以下『みつばさのかげに』）

（６） 第二詩節第五詩行の“ verlassenem ”と第４詩節第２・３詩行の “ unsere (n) ”.

（７） “ Lichtes ”―“ Leiden ”, “ Schrecken ”― “ Schuldigste ”, “ dein ”―“ deine ”.

（８） 例えば，D. Martin Luthers Epistelauslegung. Hrsg. V. Eduard Ellwein u.a.. Bd. 4: Der Galaterbrief. 2. Aufl. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1987 その他。

（９） “ aller ...bar ”, “ voll ”, “ Ärmsten ”.

（10） “ suchtest ”, “ fluchtest ”, “ verlassen ”, “ gabst ”.

（11） D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Bd. 18. Weimar 1908. S. 633, 7 ff.

（12） Eberhard Röhm, Jörg Thierfelder: Juden―Christen ― Deutsche . Bd. 1: 1933 ― 1935. Stuttgart 1990. Hier: S.190（試訳）

（13） 例えば，D. Martin Luthers Psalmen-Auslegung. Hrsg. V. Erwin Mülhaupt. Bd. 1, S. 184. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1959 その他。

（14） TB 834（1939年12月24日）:「〈あなたがたは夜の聖なる祭の時のように歌うであろう。〉この夜もまた体験した。―教会の会衆がどんなに強く感じたことか，説教のくだりでこんな言葉が発せられたときに。〈彼の母はユダヤ人です。これを信じない人は，どうやって罪と窮乏と死に対処するのか，見極めなければならない。〉」（試訳）

（15） 例えば，TB 302（1935年10月25日）:「全ての望み，全ての自信，全ての芸術が破局を迎え，聖書に縋るほかもう何もない。―神の前でかざせるのはただ聖書のみだ。Te totum applica ad textum, et textum applica ad te.［あなたの全てを聖書のテキストに当てはめ，テキストをあなたに当てはめなさい。」というＪシュヴァーベンの神学者Ｊ．Ａ．ベンゲルの格言］この決して理解しつくせない権利！」

（16） “ erschienen ”という語そのものの意味も多少不安定であるが，文脈を考慮すると，「・・・であるかのように見えた」という意味になる。

（17） TB133 ff.（1933年12月24日），321ff.（1935年12月24日）などの箇所を参照。

（18） 例えば，Jochen Klepper: Ziel der Zeit, 3., veränd. Aufl. Bielefeld: Luther-Verlag 1980. S.24 (“ Erfüllt von Ahnung schwieg die Nacht /[…] Der Nacht vertraut sich jedes Ding ”), 32 (“ Nur diese Nacht […] wollen die Säulen sich dem Einzug weiten. ”), 53 (“ In jeder Nacht, die mich umfängt,/darf ich in deine Arme fallen ” などの箇所を参照。

（19） Jochen Klepper: Ziel der Zeit, a.a.o., S. 33 参照：「色彩の炎の中でかつて見たことのない旗々がぎらぎら輝く。／国々の喜びの祭典が到来した。旗々はひたすら平和の印として輝き，約束された虹に似ている。…」（試訳）

（20） TB 391（1936年11月8日）（試訳）

（21） TB 395（1936年11月18日）。TB 398 （1936年12月3日）参照：「そしてこれらすべてを超えるのが，混乱の中で震えている心を越えるこの三つのこと―十字架と神の言葉と聖礼典。」

（22） TB 534 f.（1937年12月23日）参照。

（23） TB323（1935年12月25日）:「今年はいわゆるゲルマン的・ドイツ的クリスマスの酷い宣伝がなされた。しかし，信仰が慣習と決別すればするほど，そして慣習にはそれ以上のことを求めなくなった分だけ，教会の祝祭と共にドイツの祝祭も僕にとってますます大事になったことまではあんな宣伝も妨害できなかった。」（試訳）『みつばさのかげに』，93参照。

（24） TB 697 （1938年12月15日）。「みつばさのかげに」，201参照。

（25） TB 835 （1939年12月27日）:「祝祭の期間中は戦闘行為がない。政府が祝祭によせる演説は，政権と，本当にクリスマスを祝っていた国民一般との間の大きな溝を見せ付けた。僕は改作されたクリスマスの歌がいくつか載っているゲラを見た。―しかし教会はどこも満員だった。」（試訳）

（26） TB 454（1937年5月19日），試訳。

（27） TB 952（1940年12月25日）

（28） http://ourworld.compuserve.com/homepages/Alexander_Behrend/klepp-gd.htm 参照。

（29） Evangelisches Gesangbuch（以下，ＥＧ), 2. Aufl., Karlsruhe: Evangelischer Presseverband für Baden e.V. 1996.

（30） Günter Ruddat: Ohne Gott bin ich ein Fisch am Strand. Missa poetica: ein literarischer Gottesdienst zu Jochen Klepper. Bielefeld: Luther-Verlag 2003.

（31） 同掲書，38。

Jenseits vom trauten Familienfest

— Über Jochen Kleppers “Abendmahlslied zu Weihnachten” —

Tomita, Emiko　Dorothea

Die Analyse des “Abendmahlsliedes zu Weihnachten” unter formalen, inhaltlichen und zeitgeschichtlichen Aspekten offenbart einen Dichter, der in der Meditation über den Sinn des Weihnachtsfestes, über das Weihnachtsgeschehen, in Bitte und Lobpreis sich im Leiden an seiner Zeit allein auf das Wort, das Kreuz und das Abendmahl ausrichtet und zum Dichter der Kirche wird.

Key Words : Deutsche Literatur, Kirchenlied, Jochen Klepper, Nationalsozialismus